

宇栄原小学校第3回校内研修授業研究会

主体的に通ら組む児童の育成

～ 聴きあい、学びあい、支え合う授業づくりを通して ～

(1) 単元名： かけ算(1)

(2) 本時の目標： かけ算の問題づくりを通して、かけ算が適用される場面についての興味や理解を深める。

宇栄原小学校でも授業改改革の旗をあげて2年目に入る。今回は校内研修における授業研究会で2学年代表授業としてS・T先生が手をあげた。

まじめで熱心な教師であることは一目で判断できる。今年度赴任したばかりであるが、「学び合う」授業に関心を持ち、校長先生から紹介された本も精読し、日々の授業から熱心に学び合う授業づくりと自からの「学び」の追求に邁進している。宇栄原小の先生方も校内研修における「授業視点」がかなり確かなものになってきた。これまでの授業研究の積み重ねから教師たちの「力量」と同僚性の高まりを感じさせられる。(リフレクションシートNo.131、151)

本日S・T先生の提案授業もすべての先生の「学び」のネタとなる。教室を開き授業を提供してくれる教師には常に感謝の念と敬意を表して授業を参観していただきたい。

☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。



〔ぶらっと校内散策〕

左写真、本日の授業者の教室である。体育の授業で子ども達はいない。校長先生に許可をもらって拝見させていただいた。

着替えがきれいに机の上に整理されて置かれている。教師の言葉が子どもに届いていることがわかる。一方右写真、同じ教室の子どもの机の上である。さあどう見ますか？ 学級指導というより家庭における基本的生活習慣の「躰」の分野であること



は確かです。宇栄原小の各学級にも似たような子どもは確実にいることだと思います。しかし彼らがこの行為を達成できない事実は果たして子どもの責任でしょうか？イヤ違います。彼らは保護者から「教えられていない」からできないんだと理解しましょう。さらに、だから彼らにとって「育ててくれる学校」が必要なんだと理解しましょう。「弱い子どもの後ろにはさらに弱い親がいる。」「家庭でできないから学校が必要である。」この子たちの未来のために。決して「叱る」材料として取り扱ってほしくない。

〔資料の準備がいい！〕 まじめ、ていねい、優しい。「分かってほしい」が前面に出る教師

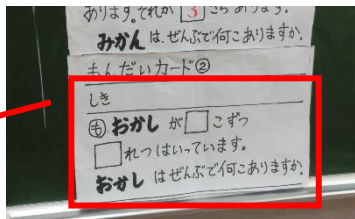
どうです教具の準備、絵には丁寧に色まで塗られています。2年生、まだ問題文の文字から題意を理解できない子は確実にいます。文字からの理解が厳しい子にとって挿絵や言葉が唯一の解決への手がかりとなるのです。それでも理解できない子もまだいます。最終的手段として「仲間ときき合う」なのです。仲間は困っている仲間を簡単に見捨てることはしません。仲間にあった言葉で、しっかり寄り添って関わってあげられるのです。授業中における教師の個別の支援には明らかに限界があり弱い子どもを常に支えることは明確に不可能と考える。

だから写真①、仲間は仲間に「つなぐ」ことが肝心で、分からない子には「教えて～」「助けて～」の言葉を持たせ仲間に依存することを教えることが大切となってくるのです。



[ビジュアル(可視化)] モノは関心と理解を高める。

問題②、お菓子の数をかけ算を使って表す。



お菓子箱の半具體物が出された。左下写真、完全に教師の意

図にはまる子どもの視線。子ども達にとってほんとにありがたい思考を助けるツールである。さて、ここまでの授業デザインでは、教師のしつかりした準備(挿絵、課題文等)が「分かりやすく」を演出し、



さらに教師の言葉による詳しい解説と説明があり、各々がワークシートをもって友達と考え方などを交流している。解答の仕方まで丁寧に教えてあげるのも、仲間同士では、あまり「きき合う」必然性が生まれてこない。授業者は、「子ども達が困らないように」と優しさを発揮するが、問題レベルや場合によっては訊き合う機会を排除していることも多々ある。時には思い切って「問題文の解釈」から子ども達にあずけてみるのも子ども達の解決レベルや関係を探る手がかりとなる。…『優しく確実に困らせる』スキルが必要となる。

[仲間の躰きは仲間にあずける]

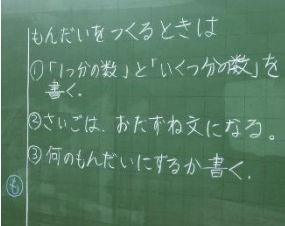


ワークシートが配布され、ペアやグループに下ろされた時、前のグループのりゅうとさんから素朴な疑問が出た。

Q: 列は縦なのか、横なのか? 確かに、箱なのでどう見ても否定はできない。すると後ろかられいかさんが箱の中の仕切りが縦であることから、列は縦列であることを説明する。すばらしい!



[ジャンプ課題] 示された絵を使ってかけ算の問題をつくろう。



3つのお盆にそれぞれ2~4つの皿がありその皿には、数の違う3種類の果物がある。子どもの視点はどこに向けられるだろう。「一つのお盆に果物がらこずつ」が授業者の意図であるが、やはり子ども達は、皿の上の果物の数を数えてしまう。しかも一皿の果物の数がみんな違うので果物では問題が作成できない。右の写真、すべてのグループがみんな考えるが必然となった。お盆のなかの果物の数という単位量に視点が向けられるかがカギとなる。さて、先ほどの問題①②がこのジャンプ問題を解決するための、足場づくり(スキャホルディング)になっていたかが大切である。ヒントではなく「足場づくり」についてぜひ、宇栄原小の校内研でも語ってほしい!



[教室の子ども達の学びの事実から『学ぶ』]

授業研究は教師の教え方より、子ども達の学びや躰きに視点を置く。子どもたちのブツブツ、ボソボソから『学ぶ』のである。いつ学びが加速し、何が躰きとなり、子どもたちの対話から互いの関係までを省察する。公開された授業を最大限に有効化させるのは、見せていただいた同僚の義務でもある。



S・T先生お疲れさんでした。純真な子ども達ですね。子どもは教師の鏡です。先生の日常の子ども達への思いが言葉や行為になって表面化され、それに応えるように育っていくものです。つまり、子ども達の教師への態度はそのまま日常の教師の姿なんです。素敵な授業ありがとうございました。

☆ 挑戦してみてください。⇒「怪我しないように転ばせる。優しく困らせる。」余談、私は必ずこの子に会いに行きます。 国頭学びの会ゆい

『一人残らずすべての児童が「安心」して過ごせる学校』

《 教師達へ 》

国頭学びの会ゆい

学校の機能（システム）は、「子ども達のために」向けられて初めて学校の目的と役割を担うことができたこととなる。多様化する各家庭の中で、我慢や辛さを強いられてそれを乗り越えて学校に「安心」と「私の居場所」を求めて登校してくる子もいる。普通という言葉は基準として設定されるが、その「普通」の基準レベルも家庭において様々である。さらにその普通を超えた特別な例外も存在することを受け入れる必要があり、その事実を受け入れる教師の器が要求される。

学校は「人格の形成、平和（安心）で民主的（平等）な国家（学校）の形成者の育成」を目指して子ども達が健やかで豊かに育つ場所であることが大前提である。しかし学校や教室がその目的や理念からゆがめられ、「教師にとって都合のいい経営」に向けられたとき、その学校と教室は困難を抱えることになる。（教師のアポリア、教室のジレンマ）

単純に賞罰で子ども達を動かしたり、教師の威圧や、集団行動を名目にした統制型の指導は、指導した教師の目の前でしか通用しない。翌年に子ども達を任せられた教師には苦労だけが引き継がれることになる。中学校に行ったとき「威圧」や「怖さ」による統制はかえって生徒の反発を招き、生徒の心を真逆に刺激してしまう（中学校の教師達の嘆きとなる。）

学校に通うすべての子ども達が安心してその苦難や嘆きを語り（心を開き）、教師や保護者、地域の人がいっしょにその困難の解決に向かい、互いが成長し合えるそんな「安心」できる学校創りに正面から向き合うことを教師の使命の一つと考えたい。

そのために以下



- ☆ 子どもの「家庭」の愚痴をこぼさない。
子どもの現実を受け入れる。
- ☆ 家庭でできないから学校がある。
家庭の困難を学校で乗り越える。
- ☆ 弱い子どもの背景には、さらに弱い親がいる。
親の弱さから子どもを引き受ける。
- ☆ すべての子どもを受け入れる。
すべての職員が受け入れる。
- ☆ 学校のおかげで育つ子を見とどける。
成長を語れる教師になる。
- ☆ 「注意！」よりも「声かけ」を心がけましょう。